

ふるさと賛歌

春の交流会に参加して

昭島市 佐藤 光子（東城町二出身）

Jネットは平成九年に発足し、春・秋年二回の「ふるさと交流会」も今回で二十二回になる。こうして北城高校時代の友人「四人組」（今回はその内の一人、新山芳子さんは所属している趣味の会の行事と重なって、残念ながら不参加）と交流会参加で、ふるさとの駅に降り立つのは、もう十回になるだろうか。

今年は例年になく低温が続き、交流会の初日の四月十五日は、桜の蕾は膨らんではいるものの、桜はほんのちらほらだ。企画して下さった方達はどんなに気がもめたことだろうと、ご苦労行きバスに乗つた。

この交流会に参加する前、平成元年頃から「四人組」は毎年観光や温泉を巡つて二泊する旅行を続けていた。当時勤めをもつていた私の都合に合わせて、期日は八月の末に決まつて、旅行が終つて別れる時には、もう一泊でもと参加している。

この交流会の目的は、上越で生まれた。来年の旅行先は決まっているほど、息が合っていた。頭の回転が速く行動的で、旅館の交渉も上手な塚田恵美子さんに、いつも旅行の詳細を任せていた。

退職して日にちに制約が無くなつた時、Jネットのこの企画に一度参加してみた。「ああこういう旅行、なかなかいいわねえ」と、高田在住の塚田さんは、一緒に参加するようになつた。

彼女は、新潟県卓球連盟上越支部常任理事、日本視覚障害者卓球連盟公認審判官で、県内外のイベントや、卓球教室の手伝いで、今も殆ど休み無しの生活だ。実技でも、県シニアの部で三本の指に入る実力者なので、指導者に引張り風の様子。それだけに、ゆつたりとした交流会に参加できるのは嬉しいという。三日間の交流会では、どうしても審判や県外の大会への引率、指導の日と重なる。が、やりくりして、

電力・東北電力で建設を担当して、こんなに大きな火力発電所の工事をやつています」（会報三十一号参照）と、

Jネットのご苦労に対して日頃思つてのこと書き、すっかり横道へ逸れてしまつた。

今回の交流会は、各自お花見をしてから、北城町の「なかしま食堂」に二時集合である。羽生市から参加の関根安子さんと、花見会場の入り口でバスを下車。日曜



塚田恵美子さん（お嬢さんは和久井会長の小学校の担任）

地元にいても知らないことが多いので、この機会を大変楽しみにしている。

上越ネットワークを支援して下る企

業や、和久井会長の顔の広さ、理事さん達の人脈で、普段は見られないような所が見学出来る。

この年齢になると、生まれ故郷が懐かしくなる。しかし、故郷を離れて生きていたために、「上越の生家はもう無い」「お墓も移してしまって、生まれ育つた上越とは縁が切れた。帰りたくても帰る足場が無い」と嘆く友人を何人も知つてゐる。

そういう人には、是非Jネットの会員になつて、進展、変貌する故郷を見つけてほしいと思い、入会を勧める。けれど、思いはあつても手続きするまでにはこんな所までも上越ですよ」「こんなに立派な施設もあるんですよ」と連れてつてもらつていて。

ある年は、「平成二十七年の三月に開業する北陸新幹線工事は、今ここまで進んでいます」と、長靴に履き替えてトンネルの中へ案内してもらつた。おかげで、工事の進捗状況や規模の大きさが実感出来た。

またある年は、「直江津港では、中部新らしい人の参加を期待している様子だ

三十三人程。しかも、参加したことのある人は、また行きたいという気持ちに至っていないのが歎がゆい。現在は七百人には欠ける会員数だが、交流会

企画する事務局では、一人でも多く、

新しい人の参加を期待している様子だ

Jネットのご苦労に対して日頃思つてのこと書き、すっかり横道へ逸れてしまつた。

※

※

※

この交流会に参加する前、平成元年頃から「四人組」は毎年観光や温泉を巡つて二泊する旅行を続けていた。当時勤めをもつていた私の都合に合わせて、期日は八月の末に決まつて、旅行が終つて別れる時には、もう

この交流会の目的は、上越で生まれた。来年の旅行先は決まっているほど、息が合っていた。頭の回転が速く行動的で、旅館の交渉も上手な塚田恵美子さんに、いつも旅行の詳細を任せていた。

退職して日にちに制約が無くなつた時、Jネットのこの企画に一度参加してみた。「ああこういう旅行、なかなかいいわねえ」と、高田在住の塚田さんは、一緒に参加するようになつた。

彼女は、新潟県卓球連盟上越支部常任理事、日本視覚障害者卓球連盟公認審判官で、県内外のイベントや、卓球教室の手伝いで、今も殆ど休み無しの生活だ。実技でも、県シニアの部で三本の指に入る実力者なので、指導者に引張り風の様子。それだけに、ゆつたりとした交流会に参加できるのは嬉しいという。三日間の交流会では、どう

しても審判や県外の大会への引率、指導の日と重なる。が、やりくりして、

電力・東北電力で建設を担当して、こんなに大きな火力発電所の工事をやつています」（会報三十一号参照）と、

Jネットのご苦労に対して日頃思つてのこと書き、すっかり横道へ逸れてしまつた。

今回の交流会は、各自お花見をしてから、北城町の「なかしま食堂」に二時集合である。羽生市から参加の関根安子さんと、花見会場の入り口でバスを下車。日曜

慌てた。

「なかしま食堂」へ行く途中の城址の中に、母校の中学校がある。

新制中学になつたばかりの当時、中学校とはいうものの、校舎が無くて兵舎をそのまま使い、運動場も無かつた。

儀式は少し離れている小学校の講堂で行われたが、先生たちはともかく、私たちは少しも不自由を感じなかつた。

むしろ棟続きの新潟大学の芸能科へ渡り廊下で繋がつていたので、昼休みや放課後はピアノの練習をしている学

生たちの所へ行つたり、描きかけの油絵のカンバスを覗いたりして、学生とお喋りをするのが樂しかつた。芸術系の大学生の影響もあつてか、今の



薔薇の下でのお花見

光子

子供の頃の素朴な花見の思い出などをのんびりと話をし、花見気分に浸つた。気がつくと集合時間が迫つていて



村山上越市長の歓迎の挨拶



お墓参りを兼ねて参加された瀬尾さんの御一行



奥田なつこさんによる「乾杯! 上越」の歌唱指導

道端の唄あひの石初桜

中学生と比べると、みんな大人びたような気がする。演劇なども先生の手を煩わせることなく、生徒が全て工具をし、市内の高校演劇発表会に参加して、発表の場を得ている。その頃私は『少女の友』や『少女俱楽部』に詩や、啄木を真似した短歌などを作つて、せつせと投稿していた。思い返すと、まさに「空に吸はれし十五の心」で、一番夢を抱いた時期であつた。

今は、ありふれた校舎になつてゐるので、気持ちは懐かしいが、建物に対しては何の感慨も無い。

校庭の前の道が行き止まりになつていた当時と違い、前を横切つて上越地域振興局の方へ抜けられるようになつて、気持ちは懐かしいが、建物に対しては何の感慨も無い。

や地元の食材を使った美味しい料理も並べられてあつた。明治四年に、高田藩医師瀬尾玄弘氏によつて西城町に知命堂病院が設立されたのだが、今回はその子孫の方達が、墓参りを兼ねて各地から九人も参加されたのが異色だつた。

やつぱりふるさとは良い。アルコロ温かい歓迎の言葉の後、乾杯。

ルが回ったせいもあり、自然に越後訛りになつて会話が飛び交う。

こういう楽しい時に歌うのに相応しい歌『乾杯！上越』が、漸く出来たと紹介された。

藤田香代理事の娘さんの、声楽家奥田なつこさんとの歌唱指導で、全員で歌つた。覚えやすい歌詞とメロディで、

軽い歌える。上越の四季を称えた夏の章で、東洋一の蓮の花に触れていたのが少し残念だったが、合併後の上越は広くなつたので、高田に偏らない歌詞にしなくてはならないと、苦労されただめだろう。

皆で同じ歌を繰り返し歌つて、と、自ずと連帯感が生まれ、歌の持つ力が実感された。



マジシャンKAZU（お手伝いは瀬尾隆さんの奥さんの優里子さん）



金型あからくら荘での宴会前の記念写真

マジシャンKAZUの手品も不思議で、樂しかった。

大きな洋室と二間の和室があり、広々として立派な宿である。

この宿はとても好評で、去年の春も観光の大型バスともいえる二時間程の楽しいひと時を過ごし、四時には頸城交流会の序章ともいえる一時間程の楽しいひと時を過ごし、四時には頸城観光の大型バスで、その夜の宿『金型あからくら荘』へ向って出発。自家用車の人もいたので、バスには空席もあり、ゆつたりとしている。大方の人は、心地好げにおやすみだ。

私たちには、かつて朝夕伸びだよ高の雄姿、穏やかな南葉の山容を窓から堪能した。

一時間程で赤倉に到着。この『金型あからくら荘』は、会員の権野利介氏の設計によるもので、贅沢な建物が存分に使われている。一室に湯量の豊富な温泉に入り、六時から宴会。

初めて参加の人、一人で参加した人も、堅苦しい挨拶を強いる事なく、和気藹々と宴会が楽しめるのも、濃やかな気配りをされる和久井会長のお人柄によるものであろう。

宴会の後は、皆さん期待のカラオケ・ルームへの移動。寝不足だった私は、早々に部屋の方へ失礼したが、宴会以上に楽しい時間だったという。

「十六日高田へ戻る」

「いもり池」の散策の予定は、時間の都合で短縮。バスから降ると、雪解風が強く冷たい。思わず襟元をかき合わせた。

降り立ちて踏鞴を踏みぬ雪解風

光子

田中常務の案内では酒蔵見学である。去年の秋の交流会では、スキーパー正宗の『武藏野酒造』を見学した。ここも酒造の歴史は百六十年とか。恵まれた自

然、良い米、良い水を使い、越後杜氏の優れた技術によって、新潟県を代表する名酒として評価されている。試飲や購入も出来、男性の参加者には殊の外喜ばれる見学スポットである。

次の『高田小町』へ向かう途中、司令部通りでバスを降り、歩いて第十三師団の旧師団長官舎を観る。師団長の長岡外史中将は、レルヒと共に日本に初めてスキー技術を広めた人物として知られている。

『高田小町』と『高田世界館』

明治時代に建築された町屋『高田小町』の見学。「旧小妻屋」で、それを再生、活用した施設。吹き抜けがあり、その



高田小町、世界館と本町七丁目界隈を見学

入る機会は無かった。

立派なお庭を見ながら、ミニ屋会席を見た。お刺身も新鮮で美味しい。老舗だけに

器も上等で、目と口との至福の時間だつた。

『林泉寺』

謙信公が七歳から十四歳まで文武の修行を積んだ寺。古刹だけに、大きな杉の木があり、それ

を揺らして吹く雪解風が肌に寒い。杉の落葉が積もつていてうつかりすると、

『春日山神社参拝』

童話作家小川未明の父・澄晴が上杉謙信を祀るために創建したもの。

『新潮日本文学アルバム60』の、小川未明の昭和三十年代の写真は、小

中学生の同級生で、早生した富樫啓君が

早稲田大学一年の頃から写したもののが

多く使われている。

未明の後輩の高田高校の方達も、彼

『越後風立ちびに壁りたら』

光子

『くわどり湯つたり村』

そこから約一時間、その夜の宿『くわどり湯つたり村』へ。この宿は、鄙

の花のコンサートの会議で何回か使わせてもらつて、馴染みもある。その前の通りを隔てて『高田世界館』がある。

特徴を上手に活かされて、落ち着いた雰囲気である。畳や椅子の手頃な部屋が幾つもあり、四年前に開かれた「蓮の花のコンサート」の会議で何回か使わせてもらつて、馴染みもある。

その前の通りを隔てて『高田世界館』がある。

百年も続いている日本最古の映画館

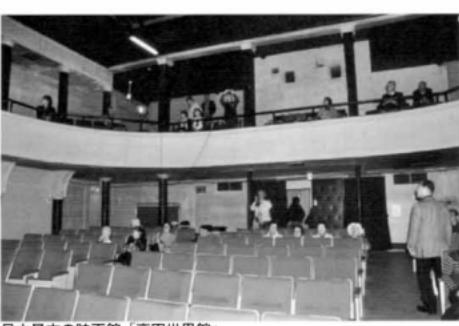
で、近代文化遺産に認定されている。館内の建材はしっかりとていて、今の建物にないレトロな造りである。椅子に腰掛けると、高校生の頃、学則が短編の「のらくろ」を上映していた。高田で高校生の時までを過ごしたの

だが、このような高名な料亭の玄関を見た。

『宇喜世』

私は毎月第四日曜日に、江東区の芭蕉庵で開かれる句会に参加しているが、その近くに「のらくろ通り」というのがある。そこは、昔の高田の本町通りや、南本町・北本町・東本町通りを思させて、懐かしい雰囲気が漂っている。

春日山城の謙信公像の前で「謙信おもてなし隊」と記念写真



日本最古の映画館「高田世界館」



老舗料亭「宇喜世」での昼食

昼食は、高田の老舗料亭『宇喜世』。江戸時代末期に遡る由緒ある書院造りの莊厳な建物。二階の大広間は百五十三畳もある。国登録の有形文化財にも指定されていて、城下町・越後高田の歴史の一端を担っている。

高田で高校生の時までを過ごしたのだが、このような高名な料亭の玄関を見た。

『宇喜世』

私は毎月第四日曜日に、江東区の芭蕉庵で開かれる句会に参加しているが、その近くに「のらくろ通り」というのがある。そこは、昔の高田の本町通りや、南本町・北本町・東本町通りを思せて、懐かしい雰囲気が漂っている。

春日山城の謙信公像の前で「謙信おもてなし隊」と記念写真



春日山城の謙信公像の前で「謙信おもてなし隊」と記念写真

『くわどり湯つたり村』

そこから約一時間、その夜の宿『くわどり湯つたり村』へ。この宿は、鄙には稀なお洒落なお料理が出るので、個人的にも友人を誘つて何回か来ている。評判が良くて、希望する日がなかなか取れない宿である。

宴会場に入ると、一泊だけ参加の岩関順雄氏の姿があつた。岩関氏のことは、会報三十号で拙文「言葉は易しく思いは深く」で、新潟日報の俳壇で中原道夫、黒田杏子選を受け活躍している人として、氏の俳句も紹介している。

既に日報俳壇賞佳作を二回受けておられたのだが、去年の十月には、

まんざくもてまんざく括り山下りる
のぶお

が黒田杏子選で、第百一十六回日報俳
壇賞を受賞された。



岩関順雄さん(中央)と黒田杏子・藍生主宰、中原道夫・銀化主宰

生という四人の美女のガードが堅固で
近づけず、諦めた。

のぶお

副会長の松川太賀雄氏は岩関氏と親友
で、いつも岩関氏の俳句情報を私に届けて
くださっている。七月九日に、「今週はな
んど、

とぼけた名前が良い。「海の色」と言つた
だけで、何も説いていないが、真っ青な海
の広がりが見える。

この句には、これだけで「句集を読んで
みたい」と思わせる力があると思った。短
い言葉で、そう思わせるのは、凄いことだ。
私の所属する「岳」の俳句六月号に、

22

とぼけた名前が良い。「海の色」と言つた
だけで、何も説いていないが、真っ青な海
の広がりが見える。

この句には、これだけで「句集を読んで
みたい」と思わせる力があると思った。短
い言葉で、そう思わせるのは、凄いことだ。
私の所属する「岳」の俳句六月号に、

22

この句には、これだけで「句集を読んで
みたい」と思わせる力があると思った。短
い言葉で、そう思わせるのは、凄いことだ。
私の所属する「岳」の俳句六月号に、

この句には、これだけで「句集を読んで
みたい」と思わせる力があると思った。短
い言葉で、そう思わせるのは、凄いことだ。
私の所属する「岳」の俳句六月号に、

22

が黒田選

のぶお

小判草ならばさ庭に寄るほど

雁木

が「黒田杏子選の一席になりました」とめ
でたいメールが。選者評は、「齋藤凡太さ
んの句集『磯見漁師』が六月下旬角川から
刊行され好評です」だけだったといふ。
併句は無愛想に、投げ出すように詠まれ
ていて、「ん?」と思わせ、あれこれと考
えるのが楽しい。分かる人には分かる句…。
皆に分かる句は、句会で点が入るけど
「高点句に佳句なし」と言われていた。
主審に「併句はイメージを詠むことだ」
と教えられている。

のぶお

六月や凡太句集の海の色

まなうらは記憶の棲みか夕ざくら

雁木

という句があり、衝撃を受けた。
木は、まさに女体。ギリシャ神話の酒の神
バッカス。そして自在に伸びた枝から、饗
宴への連想。なんという感性なのか! と。

この二句は、いずれも名詞だけで表現さ
れている。用言(動詞、形容詞、形容動詞
や副詞)を用いていないことで、説明や読者
への説しつけがなく、ぶっきらぼうの様で
読み手をたっぷり楽しませてくれる。

七月二十三日の朝日俳壇の下の【風信】

に、この句集が紹介されていた。

「新潟県出雲崎に住む八十六歳の現役漁

師。海とともに生活を生き生きと詠む。

「水に浮くわが身も焼くる大暑かな」。
この欄に取り上げられるのは、俳壇で注
目されるに値する句集なのだ。

岩関氏は六十五歳から俳句を始め、古希
を過ぎた人は思えない柔軟な感性の持ち
主だ。
氏に関する俳句情報は、おおいに私の刺
激になつていて。

十七日

桑取の雪解川音無聲せり

光子

今日の囁吟である。
私はお酌に行つて氏と俳句の話をし
たいたつたのだが、中学時代の同級
生は凡太なる俳人は知らない。

私は凡太という、くすりと笑いを誘うような
と教えられている。

この時期に桑取に来ることが多いせ
いか、側溝を勢いよく流れる雪解け



佐藤光子さん(中央)と宮坂静生「岳」主宰、現代俳句協
会会長(右)、小林貴子「岳」編集長

の川音をいつも聞いていた。この宿を巡るようにしてやはり細くて浅い川があつたので、ひたひたという川音に落ち、目覚めていた。

大半の人は早起きして雪渓を踏んで集まってきた。

朝食は、地元で採れる山菜などを中心とした和食バイキング。これは、今回初めての試みだという。ここで獲れるお米や味噌、漬物が美味しいので、それだけで十分と思われたが、自由に取り分けられる山菜の炒め物や胡麻和えなどが美味しくて、お代わりする人が多かった。このバイキングはなかなか好評だった。

食事を済ませて食堂を出ると、楽し



藤本彰三農大教授による「じょうえつ東京農大」の活動の説明

みにしていた朝市が開かれていた。切り餅、笹餅、ぜんまい、こごみ、ふきのとう、蕨の塩漬け…、保存の利くものを買い込む。宅急便はJネットで負担してもらえることなので、重たい物も安心して購入した。

『じょうえつ東京農大』訪問

東京農業大学では、学術フロンティア研究において、平成十七年から桑取谷浜地域で有機栽培実験を行い、研究成果の実用化と地域振興を目指して、平成二十年四月に株式会社『じょうえつ東京農大』を設立した。

桑取谷浜地区には多くの耕作放棄地が存在しているという。その中の十ヘクタールを再開発して有機農場経営を開始したそうだ。

この取り組みは全国評価を受け、平成二十三年五月に、第三回耕作放棄地発生防止・解消活動表彰事業で、全国農業会議会長賞を受賞している。社長でもある藤本彰三教授（会報三十一号で巻頭言を書いておられ、この会社の立ち上げ、活動について詳しく述べておいでである）は、東京での教授会を欠席して、今回の私たちの訪問を待つていて下さった。

土地が粘土質のため、耕作に苦労がある事、今は經營が苦しい。けれど、熱心な学生達と一緒に有機農業に取り組んでいる、と熱く語つておられた。話ををして下さっているテーブルに、Jネットの広告で馴染みになつていていた。試食も出来、品々が並べられていた。

大根の漬物にも数種あり、地酒をいただきながら味比べをする。「旨い、旨い」と声が上がり、その声に藤本教授は満足そうに微笑んでおられる。

「乾燥野菜は水に戻さないでも、煮立つたところへパツと入れればいいの。そのまま豚汁に使えるし、便利よ」と、使ったことのある人が自慢するよう言っている。

「雪下踊り」と名づけられている真っ白な大根の乾燥野菜は、雪の下から甘味を増した大根を掘り出して、手を掛けた作たるもので、イチ押しのものだという。

緑と黄色の色鮮やかな乾燥カボチャや、炒め物にぴったりで直ぐに使える緑色のズッキーニなど、本来の色がそのままの乾燥野菜は、どんどん売れていて、それを参考にすれば美味しくいただける。

なにしろ有機農業での野菜ということも、プリントされたレシピも用意されていて、それを参考にすれば美味しくいただける。

そこで、台所を預かっている主婦には、安心で魅力ある品々ばかりである。ボン酢四兄弟や真昆布しようゆ、農味噌などへも次々手が伸びる。そうだ、地震などへ備えての保存食にも適している。

Jネットのカタログは、スーパーのちらしなどで見る商品の値段と比べると高いので、「一の足を踏んでしまう。しかし、現地で味見をしてみると、真昆布しようゆやドレッシングは、確かに味が深い。手のかかる有機農業で大量生産出来ないために、思わず囁いた。その人も何度も大きく頷いた。



4名の農大生による「大根踊り」

光子

『マリンドリーム能生』

ここで、私は京都に住む息子の家族宛にすわい蟹を送ろうと楽しみにしていた。家の近くの三多摩市場でも買って送ることはあるが、やはり産直ものには適わない。

友人が推薦してくれた店で、吟味した。

遙りてみて指挟みたる蟹とせり

光子

掴んだ途端、鉄を振り回し、指を挟むほど元気の良い蟹を人数分選ぶと、茹で上がった姿と色に満足し、宅急便。家にも、蟹とゲンギョを買う。

「マリンドリーム能生」は、以前「マリンパーク」と呼ばれていた。

平成十三年の三月十一日に、当時所属していた俳句結社『麓』の同人総会で吟行した地である。その年は雪が多く、まだ雪が降っていた。この建物の裏手には、海まで足跡の全くない雪景が広がっていた。そこへ踏み出して、

「海」に置き換える思いは深い。

齋藤美規主宰は、「無垢の雪」と読み

たことが私は嬉しかった。雪国に永く間住んでいて、こうした自分の雪がなかなか見えてこないので。海は故郷の海、そして無垢の雪。それが羨ましい」と、特選に。

後に、詩人の高野喜久雄氏は、「ぼくもこの句は好きです。骨太で、したかなか自己凝視があつて、しかもそれを露に外へ出さない点に胸打たれました。どうか、エネルギーを分散させずに、精進してください」と書いてください

「あれにも、これにも手を出していくことは駄目です」という忠告だ。しかししながら、その忠告は今も未ださつた。

三浦さんは、「ここ数日、海にイルカの大群が押し寄せて、それに追われた鯨が名立の浜などに打ち上げられている。お陰でここ数日美味しい鯨を食べているよ」とのこと。

もしかしたら、その光景が見られる

良寛の母恵ひの佐渡おぼろかな

光子

『上越観光物産センター』

旅の終わりは、上越の物産・特産を展示販売している物産センターである。

関根さんは行くところ、行くところで目についたお酒を買って宅急便で送っている。自由に旅行に出してもらえる、お酒好きなご主人への土産だという。「これだけ送つておけば、主人は行つては駄目つて言わないのでしょう」と、言いながら。

この物産センターでは、かんずり、蓮めん、ワイン、麩、漬物の他、ル・レクチエのクッキー、羊羹、れんこんチップなどのお菓子を、一抱えレジに運んでいる。これは、息子さんが開いている医院の看護師さん達や、普段お世話になつているご近所さんへの土産

日本海の磯料理が自慢というお店で、海の物尽しの屋御飯。

見つたら、Jネットの創設当時、市役所で担当して、お世話を下さった三浦さんだった。当時はお若いと思っていましたのに、もう定年になられたのか、と歳月を感じた。

かと海を透かしてみたが、霞んでいて見えなかつた。

の句を得た。

海にもうと近づきたくて雪を踏む

光子



三浦元二さん（上越市の元企画部長）の近況報告



「お元気で！」バスに手を振ってくれた三浦さん



佐藤光子さん、関根安子さん、塚田恵美子さん

とか。

買う時には、あれこれと迷わず「これと、これと、これと、これ」と即断即決。(こういうお金の使い方をするのを、「おとな買い」というのだと、京都生まれの嫁が言っていたつけ)見ていても気味が良い。

「なんたって、お土産は上越のものが喜ばれるのよねえ」「これは、帰つた時に直ぐに食べる物だから手に持つて…、これは、宅急便にして…」と、えり分けるのに忙しい。

そして、「ああ、あ。お財布軽くなっちゃつた。どうしよう。明日から当分、みそ汁とお漬物で御飯だわ」と、皆を笑わせる。

ふるさとに山や海があることは素晴らしい。このように健康で気楽に旅に出られるのは、周囲の理解があるからで、感謝しなければならない。否、このようなふるさと訪問が出来るのは、「Jネット」という素晴らしい組織あるからで、なんとも有り難く幸せな事だ。

買い物を済ませてバスに戻るとき、雨が当つてきた。旅行の間は傘を差さずに済んだことも、幸運だった。

今年は、高田城址の四千本の満開の桜を観ることが出来なかつたけれど、今このセンター辺りの桜は三分咲き。初々しい桜に出会えた。

めに、改札口へ急いだ。

明日開く花の音に雨珊瑚

光子

(完)

春の交流会はどこも思い出になつてしまふが、「どこが一番?」と訊かれた。「私は『じょうごえつ東京農大』訪問を举げます。彪の素敵な藤本教授が、有機農業を熱く語られたまほや」。

講わるままに、作業服で大根踊りを披露してくれた学生さん達のさわやかさは三ヶ月過ぎた今も鮮やかです。貰い求めた「真昆布だし」は、そうめんをいただく今の季節に、焼き肉のたれはスダミナ補給に、とても重宝しています。



「くわどり湯ったり村」で見送ってくれた瀬尾さんグループ



「くわどり湯ったり村」宴会場での集合写真

直江津駅でバスを下車。お世話になつた交流会担当の方達に深く頭を下げる、三時二分の一はくたか十五号に乗るた